石油とイスラエル

舘（たち）　鄰（ちかし）（動物）

ヨム・キップール戦争と俗に呼ばれる第4次中東戦争が10月に起こって以来，アラブ諸国の“石油戦略”が効果的に実行に移され，新聞でもアラブ諸国に関連したニュースが多く載せられるようになった。まさに，対アラブ総力外交戦といった感じなのであるが，こうした時にこそ，イスラエルに視点を合わせた見方が必要なのではなかろうか？　イザヤ・ベンダサンの「日本人とユダヤ人」から，ユダヤの教えを孫引きさせて頂くと，「満場一致は何かおかしい」のである。

私は昨年迄，足かけ7年程イスラエルのワイツマン研究所に滞在していたのだが，最近多くの方から受ける質問は「イスラエルの為にどうして世界中がこのように騒がねばならぬのか？」という主旨のものである。社会的に有力なユダヤ人の多いアメリカはともかくとしても，ヨーロッパの諸国が，頑固と思える程に，アラブの石油戦略に対抗しているのが不可解だというのが質問の骨子であると思われる。勿論このような質問に生物学者である私が正確に答えられる自信はなく，又，明快な回答がある筈もないが，大まかに私なりの考えをまとめてみたい。

イスラエルと言った時に，普通の日本人に浮かぶイメージはどのようなものであろうか？　残念乍ら，今の私にはばくぜんと想像するしかない。しかし西欧諸国の人人に抱かれているイスラエルの平均的な像は「中東にユダヤ人が作った小さな近代国家。資源らしい資源は殆んどなく，強大なアラブ諸国に囲まれ，教育程度の高い，優れた，勤勉な国民が，進んだ科学技術を支えとして，福祉国家建設を目標に生きている国」といったものではないかと思われる。イスラエルの広報印刷物によく見受けられるのも，大体この線であり，実際に住んでみても

このイメージが特に作為的な強調を含んでいるとは感じられない。

さて，このイメージの内容は多くの先進国又は“中進国”にあてはまるもので，決してイスラエルに特有なものではない。先の文の中で，中東，ユダヤ人，アラブといった言葉を除けば，それが，オランダ，デンマーク，イギリス，或いは日本のことだと言っても不都合はあるまい。日本の場合には，隣国と地続きの国境こそないが，中国，アメリカそしてソ連と，超大国に周囲をとりまかれ，少い資源で，高い教育程度と，勤勉さを資本とし，円滑な貿易活動を頼りに，激しい世界の潮流の中で生計を立てているのである。

このような国々が資源の強大国，或いは軍事，資本の強大国からの圧力にいかに弱いかは今度の石油戦争で我我が痛切に経験していることである。国境を相接したヨーロッパの国々では，国家相互間の関連も深く，又それだけに，お互いの警戒心も強くなるのであろう。西ドイツ，フランス，或いはイギリスといった“強大国”ですら，アメリカ，ソ連又は英独仏三国間の複雑な力関係に対する警戒の念をゆるめ得ないのであるから，小さな国ではなおさらのことだと思われる。

ヨーロッパ諸国の人人が，イスラエルの置かれている現実を身近かなものと受け取り，その運命を「明日は我が身」と感じているとしても不思議ではない。Power politics の横行する中で，小国はどこ迄大国の圧力に抵抗し，“独立”を全うし得るのであろうか？

ここで，イスラエルこそ Power politics の代弁者であり，好戦的な帝国主義国家なので，アラブはその被害者だという見方は，当を得たものだと思えない。イスラエルにも，軍国的ショービニスト，経済帝国主義国家という側面があることを否定するつもりは無いが，それは日本人が GNP ショービニストであり，経済帝国主義者だというのと似た程度のものである。大きなだけに，日本の方がはるかに罪は深かろう。近頃話題になるキーセン観光はほんの一つの症候に過ぎないのである。

イスラエルが現在の占領地域をなかなか手離さないのは，アラブ諸国に対する恐怖と不信の故であるというイスラエルの主張を，私は素直に受け入れたい。

イスラエルのパレスチナの地に対する歴史的な権利が正当かどうか，というところから議論をする勇気は私には無い。この議論はまるでメビウスの輪をたぐるように，可害者と被害者が入れかわり，果てしなく思えるのである。サルトルもこうした論争にさじを投げた一人である。ただ，ドイッチャーのように，イスラエルの建国に反対する思想的立場もあり，又現在の政治状勢に批判的なユダヤ人知識人も多いことはつけ加えておく必要があろう。しかし，西欧諸国では，イスラエルの国家としての存否を問う姿勢は，も早や全く失われていると言っても過言ではあるまい。

第2次大戦のナチの亡霊は，大国に接して生きる人人の胸にまだ出没する。私共は原爆の恐怖を年と共に忘れてゆくが，記憶のうすれることは，現実の危険が無くなることでは勿論ない。

原則論の“立て前”を離れた，エネルギー外交，資源外交といった即物的な外交路線には，本来我々が避けようとしている落とし穴に自ら飛び込む可能性があまりに多く秘められているように感じられる。対米一辺倒からの離脱どころか，ますます一つのバスケットに卵を積み込んでいるのが現状なのではなかろうか？　日本の失うものは大きいのではないだろうか？石油だけが我々が外にたよっているものではないのである。

私は，6日戦争以後のイスラエルの政治的立場を盲目的に支持している訳では決してない。アバタもエクボと，イスラエルを愛する必然性が，日本人の私にないのは当然であろう。パレスチナの避難民の処遇を巡って，或いは彼らの残した財産の処分に関して，又占領地域の支配に関して，イスラエルも痛い傷を沢山持っている。占領地域のアラブ人の独立運動については，いくつかの優れた本が書かれている。しかし，イスラエルが周辺のアラブ諸国の社会に与えたプラスの影響も又大きい。

寒さにふるえ，物価高におびえ乍らこの小文を書いている私に，原油の重要性がわからぬ筈はない。しかし，原油の不足と，イスラエルの問題は，密接な関係がありそうで，実は全く別のことなのではなかろうか？　本来関係の無いことなのではないだろうか？

世界の人口増加と，生活程度の向上が，いずれ資源の涸渇を招き，いわゆる資源保有国が，資源保護に傾くのは当然であろう。我々が直面しているのは，単に今度の中東戦争の結果ではなくて，未来の文明社会の現実であり，又近代国家の独立とは何かといった問題なのであろう。

ずい分遠まわしのようだが，これが，冒頭の質問への私なりの答えである。

手うすだった中東外交（イスラエル外交も含めて）が見直されることは，私にとって極めて嬉しいことである。ユダヤ人とアラブ人とは，元来文化的にも近く，中東問題の理解には，両方を理解することが必要な筈である。そしてこのような努力は，もともと中東戦争とは関りなく行われるべきものであって，いたずらにアラブ諸国とイスラエルを対極に置いて一方に猛進したのでは，

文化国家日本も，片寄った利益の走狗に過ぎなくなってしまうのではないかと思うのである。

中東の風土は，かってユダヤ教，キリスト教，イスラム教を生み，世界の動きに大きな影響を与えた。クリスマスの鐘の響くエルサレムの丘は，又我我に大きな問題を提示しているのではなかろうか？